

スポーツ集団の Morale と競技力の関係性について
～ボート競技に特化して～
About the relation between Morale and the performance of the sports group.
-It specializes in the boat game-

1 K07B096-7 坂本 美喜
主査：間野義之 副査：作野誠一

1. 緒言

バーナード (1938) によると、組織とは「2 人以上の個々の、意識的に調整された諸活動、諸力の体系」としたうえで、作野 (2009) は集団を①統合的な「われわれ意識」②共通の目標・関心③構成員の行為や相互連関を規制する規範④コミュニケーションによる意思疎通と持続的な相互作用⑤一定の役割分担に基づく機能的結合とし、その 5 つの要件を十分に満たすものを組織としている。

スポーツ集団においてもこれら 5 つの要件は重要であると考えられる。スポーツ集団・組織の評価についての研究はモラルを用いて、これまでスポーツ社会学の分野を中心に行われてきた。スポーツビジネスの分野においては、企業スポーツを持つことによって社員の帰属意識が高まるなどの様々な影響についての研究が進んでいるが、スポーツの組織においてスポーツ集団自体が競技成績にいかに関与を与えるかという研究までには至っていない。

ここで述べるスポーツ集団のモラルを、「成員が集団の目標に積極的な意義を感じ、強く結束して、集団の規則を遵守し、風紀に従いながら、その目標のために、集団の活動を高められるような集団的機能の特性」(竹村 1967) と定義する。

競技成績の要因は様々であるが、集団モラルと競技力の関係が明らかになることで、スポーツにおける組織自体が競技成績に与える影響について相関関係があると考えられる。

2. 研究目的

本研究の目的は、スポーツ集団の Morale と競技力の関係性について明らかにし、今後のスポーツ集団の円滑な運営と競技力向上について示唆を与えることとする。

3. 研究方法

先行研究である竹村 (1967) のスポーツ集団におけるモラル調査項目を基に、スポーツ集団のモラル調査結果と競技成績との関連性を明らかにし、その分析結果を基にインタビュー調査を実施し原因を明らかにした。

本研究の対象は、団体スポーツの中でも究極のチームスポーツとい

われる「ボート競技」に特化し、戸田オリンピックボートコースを拠点とする 22 大学のボート部のうち男女が所属している大学でなおかつ競技成績が拮抗していると思われる 3 の大学を対象に計 106 名 (男子 55 名、女子 51 名) に質問紙調査を実施した。参考競技成績は 2010 年 8 月 19～22 日で行われた全国大学選手権大会の競技成績を参照とした。

4. 結果

モラル項目の基準である、部員と部との関係、部内の人間関係、部の集団機能、個人的満足感、競技への愛着度の 6 グループ計 21 項目のうち 18 項目に 3 大学の有意差が認められ、いずれも競技成績が最も高い A 大学が有意に高かった。しかし、競技成績が 2 番目である B 大学と 3 番目の C 大学間では有意差はほぼ見られないという結果であった。

唯一、部の集団機能の指導者の指導力を問う項目において、3 大学間、各大学間で有意差が認められた。よって、一番大きく競技成績に影響を与えるのは、指導者による指導力という結果であった。

5. 考察・まとめ

有意差が認められた 18 項目全てにおいて競技成績が最も高い A 大学は、作野 (2009) の組織の定義である 5 つの要件を全て十分とはいえないが、高い水準で満たし、モラル得点も有意に高かった。一方、B 大学と C 大学の間では有意な差は認められなかった。よって、集団モラルが競技力に与える影響は絶対条件ではなかった。しかし、有意差が認められた全ての項目で A 大学が有意に高いことから、競技力の高い集団において、高いモラルを持つことが必要条件であることが考えられる。

以上のことから、スポーツにおける競技力向上には技術面などのテクニックのみならず、集団・組織における調和や信頼、環境などの集団モラルも一つの要因として明らかになった。

その為スポーツ集団の競技力向上のためには、組織としての機能を確立することが早急に求められる。